

抄録

## 生体肝移植ドナーはどのようにして決まていくのか

——移植後数年以上経過したドナーの語りから——

一宮茂子（立命館大学大学院 先端総合学術研究科）

**【目的】** 生体肝移植ドナーはどのようにして決まていくのか、を明らかにする。

**【方法】** ドナー経験者にインタビューを行い、語りを分析する質的研究である。

**【結果】** Aさんは夫と次男の3人家族であり、長男は妻と幼児の3人家族である。夫は会社を経営し、妻子を養い、長男家族に家を与え、A家を支配する権力をもっていた。Aさんは内向的で夫唱婦随であり、家事労働を担っていた。長男は肝臓の難病で重篤な状態となり、家族は移植まで1週間という時間的制約のなかでドナーを決定する必要があった。ドナー候補は、Aさん、夫、次男、長男の妻であるが、最初に夫が拒否したため家族内に調整役が不在となった。ICの席上でドナーの話となったとき、Aさんは夫と長男と長男の妻が「一斉に私を見た」ことで視線による圧力を知覚したという。医学的に夫と長男の妻はドナー不適応となり、夫と長男からドナーを懇願されたAさんは、次男を傷つけない実母の心情と、長男を助けられないわけにはいかない継母の心情に苦悩しながら余儀なくドナーを引き受けた。

**【考察】** A家は夫が家産と家族員に対して統率権をもち、家族員は人格的に恭順・服従する家父長制を内包していた。Aさん家族と長男家族は移植問題に巻き込まれて家族ダイナミクスが生じ、家族内の力関係でAさんがドナー候補に浮上してきた。Aさんは今まで生きてきた営みの関係性のなかに働くジェンダー力学によってドナーに決まていったのである。